

のんびり

11 non-biri
2014 Winter





うんとこしょ!
どっこいしょ……?!!

9月27日、快晴。のどかな風景が広がる北秋田市合川が今回の撮影の舞台。

今号のテーマは「縄文」とあるカボチャ畑で、巨大な土偶が発見されました。それを発掘しようと一生懸命引つ張っているのが、農作業中のお父さん、助っ人のお母さん、学校帰りのお姉さんにわんぱくな弟。家族で力を合わせている姿は、「大きなカブ」ならぬ「大きな土偶」!「うんとこしょ!どっこいしょ!」そんな家族のかけ声に誘われ、時空を超えて縄文人までやってきてしまいました!

土偶のモチーフは、撮影場所からほど近い、国指定史跡の伊勢堂岱遺跡から出土された板状土偶。秋田公立美術大学の学生が見事な技術で制作した、およそ3メートル、実物の約19倍の高さという大作です!

出演のみなさんはこの日が初顔合わせだったにも関わらず、息がぴったり。さらに全員の素晴らしい演技力で現場は大盛り上がり! 全力で役になりきっている姿を写真家の浅田政志が撮影します。

その様子は「のんびり公式ウェブサイト」で公開中。また、写真が動画として楽しめる「AR」という技術を使った特別動画では、出演者のみなさんの最高の演技が見られます。スマートフォンをお持ちの方は、下記を参照の上、専用のアプリをダウンロードし、この写真をご覧ください。

【動画の再生方法】

- ①専用の「ビューアアプリ」をダウンロード。
- ②「ビューアアプリ」を起動して設定画面に「ATFM-2509-0561」のチャンネルコードを入力。
- ③スマートフォンを上記の写真にかざすと、画面上で動画と音声は自動再生!



専用の「ビューアアプリ」のダウンロードは右のQRコード、または「うごくプリント」で検索してください。
※専用の「ビューアアプリ」はiOS6.0以降、Android OS Ver4.1以降 対応

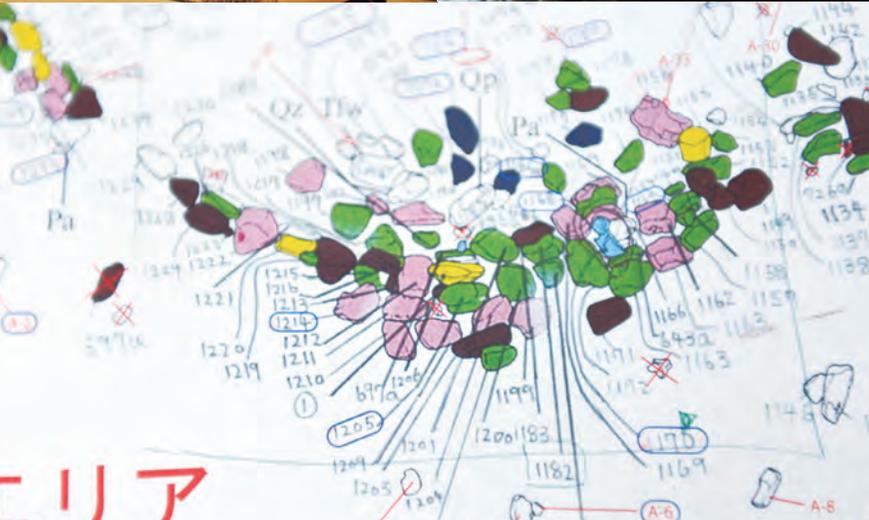


のんびりしたいは
みんなのきもち
のんびりできるは
ゆたかなあかし
のんびりまっすぐ
秋田のくらし

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。その豊かさが秋田の実直なもののつくりを支えてきました。そして同時に、秋田の人々のなかには、大らかで力強い、「のんびり」精神が育まれました。そんなのんびり秋田は、右肩上がりの経済成長という、ゴールなきゴールに向かい、懸命に走ってきたラッポンにとってまるでピリを走るランナーのように映っていたかもしれません。

けれど世の中は変わりました。順位など気にせずのんびり歩いてきたことがまさに「のんびり」となる時代がやってきました。日本人の多くは今、うまい飯が食べられてうまい酒が飲めるという当たり前の豊かさについて考え直しています。しかし秋田では昔も今も、ずっとそれが人々の暮らしの真ん中にありました。

ピリだ一番だ。上だ下だ。と相対的な価値にまどわされることなく、自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。そんなラッポンのあたらしい「ふっふ」を秋田から提案してみようと思います。



Contents

1 のんびりまっすぐ秋田のくらし

4 縄文とエネルギー

縄文と繋がる

6 第1章 エネルギーを考えるかい？

14 第2章 大湯環状列石へ

20 第3章 鹿角ホルモンとエネかん

26 第4章 伊勢堂岱遺跡と板状土偶

32 第5章 ダンプリ長者と太陽と

40 第6章 ストーンサークルのなかで

45 下戸式秋たんぼう 福田利之

第11回/なべこたよ、全員集合！

51 詩修「池田修三と詩人たち」詩作企画

最優秀作品 前沢しより

52 写真家 浅田政志の撮らざるにはいられない!!

第11回/農家

57 高和製作所がつくってきたもの。

64 non-biri akita access map



今号の「あきたびじん」ぶつ 相関図

縄文と 繋がる

prologue

組石1号(内帯)

組石 2号(内帯)

毎号さまざまな写真家さんに登場いただき、あらたな視点で秋田を切り取ってもらおうと始めた裏表紙の写真連載『discover AKITA』。前号の連載において、個人的に「りす写友会」という写真部活動でも一緒にさせていただいている俳優の佐野史郎さんに撮影をお願いしました。佐野さんは鳥根県松江市のご出身で、佐野さんの母方が出雲大社で写真館を営んでおられたりと、出雲とのご縁がとても深い方。そんな佐野さんとともに日本三大盆踊りのひとつでもある「西馬音内盆踊り」を観に行ったときのことです。

徐々に夜も深まり、いよいよ亡者と生者の境が消え行くような盆踊りの光景のなか、少しずつ音頭の歌詞も艶めていくのですが、僕も佐野さんも秋田出身ではないゆえに、秋田訛りの詞がなかなか頭に入ってきません。しかし突如、佐野さんが「あっ！ いま、出雲の神さまはるばるやってきた」って言ったよね？」と言うから僕はびっくりしてしまいました。僕には聞き取れなかったのですが、佐野さんの耳にはしっかりとその言葉が入ってきたようで、後

ほど調べてみると確かにこんな歌詞がありました。

出雲の神様踊りこ見であとで
はるばるやってきた 上手に踊れば
手帳さ控えて 嫁こに早くやる

目の前に広がる妖艶な盆踊りはもちろんのこと、僕はこの小さな出来事にとっても感動しました。佐野さん自身、このときの体験を前号の奥付でこのように書いてくれています。

歌詞の中に「出雲の神様はるばるやってきた」と聞こえてきた。秋田の言葉が、方言が次々と身体に飛び込んで来る。何故だ?! 出雲の地を故郷に持つこの身体のなかに、遠い、この国が成り立つ遙か以前から伝わる音が、出羽と出雲を分けずに入ってくるからだろうか？

佐野さんのこの体験は、これからの時代をどう生きていくべきかということにおいて、非常に示唆に富んだ体験だと僕は感じました。国家成立以前の縄文人としての出雲族の血が、佐野さんのなかでまっすぐ古代の秋田と繋がったようなこの出来事に、僕はこの『のんびり』でやってみたいと思っていた特集テーマをいよいよやらねば、と思いました。

常日頃から、僕たちが歩むべき未来は、進化ではなく深化だと感じていた僕は、未来のお手本ともいえるべきものが縄文人の価値観のなかにあるのではないかと思っていました。しかし、モノや情報で溢れる物質的なこの世の中で、縄文とまっすぐ繋がろうなんてことを言いだそうものなら、なんだかオカルト話のように思われてしまいかねない、という思いが僕を躊躇させていました。しかし佐野さんの体験を目にした僕は、縄文と現代とが違和感なく繋がれる確信を得たような気持ちになったのです。ゆえに、今回お届けする特集テーマは秋田の縄文です。そして実は、縄文特集を組むべく僕の背中を押してくれた人物がもう一人いました……。

さあ、今回ものんびりじっくり、僕たちの取材旅にお付き合いいただければと思います。

藤本智士(のんびり編集長)

組石38号(外帯)

組石34号(外帯)

日時計状組石

組石25号(外帯)

25

縄文と エネルギー

取材文 藤本智士

Text Satoshi Fujimoto

写真 浅田政志・鍵岡龍門・船橋陽馬

Photo Masashi Asada / Ryumon Kagioke / Yoma Furubashi

エネルギー を考える かい？

第1章

もう一人のキーマン

佐野史郎さんと秋田を巡ったことから、いよいよ決意した秋田の縄文特集ですが、そのことを周りの友人に話すと、必ずと言っていいほど「え？ 秋田にも縄文遺跡あるの？」と聞かれます。三内丸山遺跡のイメージからか、東北の縄文遺跡と言えば青森県をイメージする人が多いようですが、秋田県にもたくさん縄文遺跡が発掘されています。なかでも僕が一番見てみたいと思っていたのが、秋田県北部、鹿角市にある大湯環状列石でした。規模は違いますが、イギリスのストーンヘンジのようなストーンサークルが広がるその風景は、写真で何度も見ていたものの、まだ一度も行ったことがありませんでした。

そんな頃、実は僕のもとに、ある講演依頼が舞い込んでいました。依頼主は「鹿角のエネルギーを考える会」という組織の代表の木村芳兼さん。冒頭で書いた、僕の背中を押してくれたもう一人の人物とは彼のことでした。ここで彼からの講演依頼メールを、一部許可を得て転載させていただきます。

私はアウトドアウェアを販売する企業に勤めております。環境に配慮した製品を作り、その販売を通じて環境危機に警鐘を鳴らして解決に向けて実行していく、という社是のもとに働いており、自然が好きで、できることならそのまま残していきたいと考えております。

偶然にも秋田県鹿角市生まれの女性と出会い結婚をし、田舎ができました。結婚を機に妻に里帰りをしたいと相談され、自分も田舎暮らしへの憧れがありましたが、三度落ちてからの入社だったこともあり、やりがいもありましたので、市役所の観光課を訪ね、観光プログラムのガイドをしたりしながら、鹿角市とはなんとなく関係を持ちつつ東京で暮らしておりました。そんな中で震災が起き、原発事故が起きました。

今までの生活スタイルを見直すとともに、自分にできる事はいったい何なのだろう。と考えていたタイミングで、自分は自然エネルギーに出会いました。妻の「田舎に帰って暮らしたい」という夢が、自分の取り組みがうまくいけば叶うかもしれない、大好きな場所をやめてでも取り組む意義があるかもしれない、自然をいつまでも守っていけるかもしれない、と頭に電撃が走り、そこから色々なアンテナをはりながら勉強してまいりました。

昨年、鹿角市で市民団体を立ち上げ、自然エネルギーを普及させる取り組みをはじめました。説明が長くなってしまったのですが、秋田県鹿角市での自然エネルギー普及に藤本様のお力をお貸し頂ければと思っております。のんびりなどにも表現されておられますが、自分の地域に愛着をもてる様な伝え方や魅力の引き出し方を地域の方が学び、自分たちの言葉で伝えていくような機会を作りたいと考えております。

～以下略～

僕は彼の依頼を二つ返事で引き受けました。彼の誠実な気持ちに応えたいと思ったことももちろんですが、なにより、その講演会場として予定されている場所が「大湯ストーンサークル館」。僕が行きたかった大湯環状列石のすぐ目の前だったのです。

市として日本で唯一の 永続地帯？

ある区域におけるエネルギー需要と食糧需要を、その区域で得られる再生可能電力や食糧などの資源ですべて賄うことができる区域のことを「永続地帯」と言うそうです。僕はこの講演を引き受けることから、初めてこの言葉を知りました。大きな発電所のある「町」単位では当然、供給が必要を上回って当たり前なのですが、「市」という単位での永続地帯は、秋田県鹿角市が日本で唯一のこと。僕はこのことと、大湯環状列石をはじめとした縄文遺跡の存在との間に、何かしらの関係性を感じていました。そうして決まった鹿角市での講演日は、9月23日。なんと今回の特集取材がはじまる3日前でした。

生と死が循環する

講演当日、自宅のある兵庫県から飛行機で秋田入りした僕は、「鹿角のエネルギーを考える会」代表の木村さんと、鹿角市在住で会の主要メンバーである小田嶋伸一さんの二人に出迎えていただき、そこから車で数時間かけて鹿角市へ。講演数十分前に会場に到着した僕は、そのまま「地方から発信する、新しい『ふつう』の資源」というタイトルのもと、鹿角のみなさんを前に2時間ほどお話をさせていただきました。いろんな土地でお話をさせていただく機会も多い僕ですが、そのとき僕は、これまでにないほど心地よく喋らせてもらったことを覚えています。というのも、お客さんに赤ちゃんを連れたお母さんが多く、その子たちが講演中に何度も叫びだすのです。普通なら少し困ってしまうのですが、そのときは逆でした。縄文人のお墓とも言われる大湯環状列石で、新しい生命の象徴のような赤ちゃんが、泣くというよりは歓喜のあまり叫ぶことに、僕は生命の循環を感じ、一人秘かに高揚していました。

講演を終えて「記念写真を撮りました」と木村さんが言って撮影した記念写真。この一枚をセルフタイマーを使って撮ってくれたのが、またもや背中に赤ちゃんを背負った若い女性（写真右端）で、僕はいいよ縄文とエネ

ルギーの関係の深さに笑みがこぼれそうになりました。そしてこの女性が数日後、僕たちにさまざまな気づきをくれる重要な女性となるなんて、このときの僕には知る由もありませんでした。



秋田公立美術大学 講師

石倉敏明さん

23日に講演を終えた後、一旦秋田市まで戻った僕は、いよいよ明日から東京メンバーも集結して特集取材がはじまるという9月25日の朝、のんびり秋田メンバーを連れて秋田公立美術大学へと向かっていました。本格的に取材がはじまる前にどうしても会っておきたい人がいたので。その人とは、芸術人類学や神話学の研究者である石倉敏明さん。2013年から秋田公立美術大学の先生をされています。

早速ですが、石倉さんとの対話の一部をここに記させてもらいます。石倉さんのお話は、冒頭にして、ある意味今回の特集の結論のようなお話で、僕たちはこの出会いをもって、明日からの取材の方向を定めることができました。とても重要なお話です。ぜひ、読んでください。

石倉敏明さん 40歳 とのお話



藤本 先日『のんびり』の裏表紙を佐野史郎さんに撮ってもらったんです。石倉さん（以下敬称略）そうなんです。あ、唐松神社。すごい写真！



藤本 実は僕が石倉さんのお名前を最初に聞いたのは佐野さんからなんです。藤本くん絶対会った方がいいよって。

石倉 僕も藤本さんの名前は佐野さんから……。

一同（笑）。

藤本 ようやく会えましたね（笑）。実はそもそも佐野さんには、「西馬音内盆踊り」を撮ってもらいたくってお呼びしたんです。その写真は全然載ってないんですけど（笑）。

石倉 西馬音内に行く途中で唐松神社に行かれたんですか？

藤本 そうなんです。『のんびり』をやる前に、秋田をうろろろしてなぜか唐松神社に行き着いちゃったこと

があるんです。

石倉 え？『のんびり』やる前にここにきてるんですか。

藤本 そのときは何の気なしに「すごい神社だな、ここ」って。唐松神社って社堂まで少し下っていくじゃないですか。

石倉 谷みたいところですよ。

藤本 それがすごい印象に残っています。

かつ、ちょっと妙なお宮がありますよね？

石倉 手前に。

石倉 ひょっこりひょうたん島みたいな。

藤本 そうです。人工的な感じなんですけど、なにかルーツを感じるようなところがあって印象的。それで佐野さんが来られたときに、ふと思いついて行ってみたんです。そうしたら鳥居に

「物部・エンジンアリング」って書いてあって。

石倉 僕もびっくりしました。奉納された灯籠にも「物部エンジンアリング」って。千葉の会社ですけども。

藤本 そうなんです。宮司

さんにも、日本最北の物部系の神社なんだって教えていただいて。小さな旅だったんですけど、そういうことに佐野さんをきっかけにいろいろ触れることができたんです。佐野さんは出雲の方ですけど、いわゆる出雲大社の出雲ではなく、大和に侵略される以前の出雲人というか、そういう佐野さんの深い根っこにあるものが、秋田に来て同調しているのを感じたんです。



（そのあと、佐野さんと鹿島様（道祖神）

を見てまわったりしても、そこかしこで「よくわかる」とか「一緒だな」とか言うわけです（笑）。そして最終的に西馬音内に行って、音頭を言っているから、秋田弁でいまい何言っているのかよくわからなかったのが、突然佐野さんが「出雲の神さまはるるるってきた」って歌詞を、パーンって聴き取っちゃって。

石倉 すごい、さすが役者さんの耳です。

藤本 ほんとに。僕はわからなかった

んですけど、佐野さんが「いま言った！」って。そこから「わかる、わかる、なんで聴き取れるんだ？」って。だんだん他のもわかりだしてきちゃって、すごいなあって思ったんです。

石倉 おもしろい。

藤本 そもそも秋田を縄文っていう入り口から取材してみたいと思ってた矢先の佐野さんとの旅で、これはやるべきだと思ってたんですね。で、そんななか「鹿角のエネルギーを考える会」のみなさんに講演依頼を受けたんです。それで僕なりになんで鹿角でエネルギーなんだろってことを考えたときに、やっぱりそれは縄文が露出しているからじゃないかって思ったんです。

石倉 正しいですね（笑）。

藤本 いま漠然と予感だけあって、でも、具体的にどう取材を進めるべきかが曖昧で、今日は石倉さんとお話させていただくことで、ヒントを得られればと思っちゃいました。

石倉 僕は秋田市に来たのはこの大学ができてからなんですけど、鹿角だけは以前から縁が深かったんです。なんでかっていうと、大学院のときに

人類学を教わっていた中沢新一先生が、「これはとてもおもしろい祭りなんだ」ということで、僕たち学生を鹿角の「大日堂舞楽」っていうお祭りに連れて行ってくれたからなんです。そこは「大日堂」っていう太陽の神さまをお祀りしている聖地なんですけど、もともとは「大日如来」っていう密教の仏さんのお寺だったんですよ。いまでは「大日靈貴神社」というて天照大神の神社になっていきますけれども、太陽神っていう性格は昔から変わってないんです。で、そのすぐ近く10キロくらいのところ「大湯環状列石」があって、あれは夏至と冬至の太陽の運行に合わせて設計された、新石器時代Ⅱ縄文時代の重要な遺跡ですよ。発掘では大規模なお墓も出てきているじゃないですか。そうすると、鹿角にはお祭りにも遺跡にも同じテーマが継続してあることがわかってくる。具体的に言うと、あそこは死者が埋葬されている特別な土地なので、当ても死者との関係でお祭りがされていたらうと。太陽がちょうど春分とか秋分とか、あるいは夏至や冬至に上がるときを選んでお祭りをするってことは、例えばクリスマスとか、盆踊りとか、そういう類いの季節行事とも関係しているかもし

れない。いまでも盆踊りのときに死者と一緒にぐるぐる回ったりとか、冬至や年の瀬にサンタクロースの原型って言われている、ナマハゲのような怖いお爺さんが死者の国からやってくるとか、同じ構造の祭りはユーラシアじゅうにあるんですね。こういう、死者と一緒に踊ったり、死者が時を選んで来訪するお祭りというのはだいたい、日照が一番長い夏至と、一番短い冬至っていう、太陽光のバランスが一番崩れるときだったりするんです。これは人間にとって大事なことなんじゃないか？ というところで、毎年仲間たちと一緒に、大日堂舞楽と大湯環状列石に行つて両方研究して、映画を作ろうってことを学生時代からやっていたんです。

一同 へ〜！

石倉 と同時に、実はあそこに「ダンブリ長者伝説（※34頁参照）」っていう神話が残ってます……。ダンブリってトンプオですね。あそこに語られているのは、人間と昆虫のとても身近な関係でもあるんですけども、もうひとつあって、大地から湧いてくるエネルギーという話なんです。物語では「お酒」って語られてるんですけど、たまたま男がお昼寝してたら、鼻にトンプ





るんですけど、いまのお話を聞けたことで、意味合いがはっきりしました。

石倉 縄文って1万年以上の歴史を持つってじゃないですか。大湯って4000年くらいなんだけど、そういう古いものと新しいものが秋田には両方同居してるんですね。大事なのは、縄文に戻るっていうことじゃないかもしれないけど、その両方があるってことなんだと思うんですね。で、物部も外から来た。秋田って外から来る人が多くて、古い人と新しい人が「あ、ここは一緒だ」ってお祭り一緒にやったりってことがあるんですね。7世紀頃に再び定住するようになってからも、大和朝廷に服属する浮囚^{うきこ}っていうグループと、対抗しようとする蝦夷^{えみし}っていうグループが秋田ではひしめいていて、それぞれ別の村を作っていくようになっていった。そういうグラデー



ションってすごく大事だと思うんですね。ここは縄文の場所だとか、そういうことじゃなくて「これからは新しい方向でいこう」っていう人たちもいれば「いやいや、古いものは大事なんだ」って人もいて。で、戦争もするけど和解もして。そういう歴史のなかで積み重なってきたところで、ユニークな混成文化が現われてくるんだと思うんですね。だから島根の出雲系って言われる人たちも土着系だけでも、そこには大陸の文化もあったりするわけですよ。それを佐野さんが秋田に来てわかるっていうのは、たぶん、ミルフィーユのような、重層的な文化がわかるんじゃないですか。

藤本 まさに。

石倉 たぶん、そこに日本人の特徴的なものが残ってるんだと。

藤本 時層が残ってる感じがする。

石倉 時層、そのものですよ。

藤本 来て良かったです！ 本当にありがとうございました。



が停まって、ペロってなめてみたら甘かった。それが「ああ、お酒だ」ってことで、お酒が湧いてる泉を発見するんですけど、これは当時お酒って貴重なもの、あれは大地から湧いてくる霊的な水分を「お酒」って言ってるんですね。鹿角には尾去沢^{おきざわ}鉱山があったり水源地もあったり、そういう意味では地中から湧いてくるエネルギーと、太陽みたいに宇宙を循環してるエネルギーと、この2つのエネルギーに対して、当時の人たちはずっと感受性豊かに「これは大事なものだ」と考えてきたからこそ、伝説が残ってるんだと。そう考えると縄文の人たちも、中世の人たちも、現代のお祭りを継承してる人たちも、いま、エネルギー問題に関心のある人たちも、同じように人間の外からもらうことができている贈り物としてのパワーというのをとっても敏感に感じていたんじゃないかと。これはオカルトの話じゃなくて、生きていくうえで重要なエネルギーの話なんです。人類学の中では「エネルギーゴロジ」というちょっと難しい言い方をするんですけど、エネルギーの存在ってどこからくるのかっていう学問があるんです。例えば「馬力」、馬を使ってる力とか、牛を使ってる力とか、



火のエネルギーとか、そういうものからはじまって、今度は鉄鉱石みたいなもの、鉄のエネルギーとか。さらに石炭・石油を発見したり、果ては核エネルギーを取り出したり、次世代の再生可能資源に至るまで、人間がエネルギーをどう使ってきたのかっていう歴史を研究して、人間の心と外にあるエネルギーの関係調べていこうというのが「エネルギーゴロジ」という分野なんです。当時そこに関心があったって、秋田の鹿角に通ってたっていう。

藤本 すごい。なんかタイミングがバッチリすぎて……。

一同 (笑)。

藤本 明日早速鹿角に行こうと思って

大湯環状 列石へ

9月26日



カメラマンの浅田くんや鍵岡くんたち東京メンバーも新幹線で秋田に到着し、いよいよ全員集合したのんびりチームは、ひとまず秋田市内の編集部で、これまでの経緯を共有。その後、大湯環状列石へ向かうことにします。実は先日の講演後も、「鹿角のエネルギーを考える会」のみなさんご厚意で、大湯環状列石をガイドさん以案内いただいたんですが、なぜか僕は、そのとき説明して下さったガイドさんではなく、そこに同行されていた黒澤さんという男性がとても気になっていました。この黒澤さんも、普段はボランティアガイドをされているそうで、ところどころ控えめに説明をしてくださる姿がなんだかとても心地よく、今

度やってくるときはこの人にガイドしてもらおうと良いかも、と思っていました。ということで僕は、いま一度「鹿角のエネルギーを考える会」のみなさんにお願いをして、黒澤さんにガイドしていただけるようお声掛けしていたのです。ところが、気を利かせたのんびり秋田メンバーも、ガイドさんを手配してしまったとのこと。ありゃまあ。と思いつつ、ガイドさんの名前を聞いてびっくり。なんと秋田メンバーが手配してくれていたガイドさんも黒澤さんとのこと。なるんだ、結局同じ人だったのか、とひと安心。

Wクロサワ

同じ秋田とはいえ、編集部のある秋田市内から鹿角市まではまっすぐ走っても3時間ほどかかります。途中



お昼休憩をとりながら、大湯ストーンサークル館に着いたのは約束の16時ちょうどでした。館内には先日お会いした黒澤さんがすでに僕たちを待っていてくださいました。さっそく黒澤さんにご挨拶して先日のお礼を伝えてみると、秋田メンバーの「イマヲ」こと今井春佳が「今日ガイドしてください。黒澤さんです」と若い男性を連れてきました。……え？ どういうこと？

なんと、のんびり秋田メンバーが手配していたクロサワさんは、鹿角市の職員で学芸員の黒沢健明さん。僕が「鹿角のエネルギーを考える会」のみなさんにお願いで手配していたクロサワさんはボランティアガイドの黒澤正さん。と、それぞれ別の方だったのでした！

しかしこの神さまのいたずらのような出来事から、Wクロサワさんにガイドしていただくことになった僕たちですが、そこにはとても大切な意味があることに、この後気づくのです。

お昼休憩をとりながら、大湯ストーンサークル館に着いたのは約束の16時ちょうどでした。館内には先日お会いした黒澤さんがすでに僕たちを待っていてくださいました。さっそく黒澤さんにご挨拶して先日のお礼を伝えてみると、秋田メンバーの「イマヲ」こと今井春佳が「今日ガイドしてください。黒澤さんです」と若い男性を連れてきました。……え？ どういうこと？



るんです。だけどここには昭和7年と
かかれています。というのは、昭和6
年に水路の工事をやっていたら石や土
器とかが出てきたんです。それを県
の人に連絡したんです。その手紙が
残っているもので、昭和6年になっ
ているんです。でも大湯にいまでもあ
るんです。郷土研究会の人たちがその次の年に、
いまの万座環状列石のあたりを掘って



まだストーンサークルに近づいても
いないうちからのこのお二人のやりと
りに、僕はある種のミラクルを感じて
いました。考古学的観点から記録を重
視する健明さんと、印象やイメージを
含めた多様な推論を語ってくれる正さ
ん。この二人のクロサワさんは、僕た
ちが縄文というテーマを取り扱うなか
で心配だった、特定の誰かの見解に
依ってしまうことの危険性を、見事に

藤本 これがお墓だったというのは、ど
うしてわかるんですか？
黒澤正 近くの一本木後口地区ってい
うところを掘ったら、甕棺が出てき
ているんです。骨はみんな溶けちゃっ
ていて人骨は見つかっていないんです
が甕棺が出てきたから。
藤本 そうか。純粋な質問なんです



いったんです。それで、これはストー
ンサークルがあるんじゃないか？っ
てわかったのが昭和7年。
藤本 なるほど。
黒澤正 だから、民間団体の一部の人
たちと市の見解が異なるんですよ。
藤本 とにかくでも「これは、ストー
ンサークルなんじゃないか?!」って
なったのは、昭和7年ってことですよ
ね。
黒沢健明 そうです。
黒澤正 それで昭和26年だけ？ い
まの文化庁がきちっとした戦後初めて
の発掘調査をやった。
黒沢健明 26年、27年ですね。そのと
きにちゃんとした発掘の記録を残した
んです。それで報告書も出てるんです。



だから我々としては記録が残っている
ものからしか話ができないので。「戦
時中に発掘しました」っていうのがわ
かっていても、じゃあどういう調査
だったとか、何が出たっていう記録が
ないから喋れないんです。

クリアしてくれました。これが正し
いということではなく、こんな意見も
あれば、こんな意見もある。という考
え方の幅を、まるでトムとジェリーな
お二人のやりとりから感じてもらえれ
ばと思います。

万座環状列石



大湯環状列石って？

大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座に
所在する2つの環状列石（野中堂環状列石、万座環状列石）を
主体とする縄文時代後期（約4000年前）の大規模な遺跡です。

これらの環状列石は、組石の集合体が二重の同心円状に配置され
ている配石遺構であり、「集団墓」であるとともに「祭祀施設」で
あったと考えられています。発掘調査では、たくさんの遺構とともに
縄文土器、石器などが出土しています。
また、野中堂、万座ともに、外帯と内帯の間の西側に、射線状に
石を配した「日時計状組石」があります。

黒澤
正さん 65歳



黒澤
健明さん 32歳



大湯環状列石へと向かう小径の入り
口に立つ石碑を前に

黒澤正さん（以下敬称略） これは昭
和12年に建てた碑ですけれども、この
碑については市の人間は喋れないこと
も……。

黒沢健明さん（以下敬称略） いや、
喋りますよ（笑）。
一同（笑）。

黒澤正 一応、鹿角市では昭和6年が
ストーンサークル発見の年になってい



が、お墓って、お墓の下に甕棺があったところに墓碑がたっていたりするイメージなんですが、要は、これらの石の下から甕棺が出てきたってわけじゃないんですね？

黒沢健明 ここは、ほとんど調査が入っていないんですね。

黒澤正 怖いですよ(笑)。掘るのが

黒沢健明 いや怖いんじゃないかと(笑)。調査技術が進むまで、むやみに掘るなということですよ。

藤本 へへ。むやみに掘るな？

黒沢健明 昭和26年、27年の文化庁の調査で170くらいある配石遺構のうち14ヵ所を掘っているんです。そのうち11ヵ所から穴が確認できたんですね。ひとつひとつの組石の下には穴があると。その後鹿角市が調査したのが一本木後口。あつち43ヵ所を全部調査したんですよ。配石を半分だけ寄せてそしたら全部に穴が空いていた。基本



的には個別のひとつひとつの配石遺構がそれぞれお墓だったと。こっちは全部やっていないですけど、向こうの調査結果をフィールドバックさせれば

藤本 おのずと、こっちも。

黒沢健明 お墓だったと。

藤本 そういうことか。

黒沢健明 なんで穴を掘らないかっていうとそれは将来の研究のために残しておかなきゃだめなんです。自分たちのいまの世代のエゴで、興味本位でやたらに掘ってはいけないというのは、まず考古学の基本ですね。

一同 ふーん。

黒沢健明 必要最低限でいいだろうという。

藤本 一部をやれば全体を想像できるだろうというところだ。



黒沢健明 はい。見方を変えれば発掘は破壊なので。破壊しない方がいいということですよ。

黒澤正 でも掘りたいよな(笑)。

黒沢健明 まあ、掘ってはみたいですけどね。

一同 ははは(笑)。



藤本 ちなみに日の出と日の入りの直線上にあるっていうのは、この万座遺跡と向こうの野中堂遺跡が？

黒沢健明 そういう説がありますね。

黒澤正 10年くらい前からやっとと言えるようになったんです。

黒沢健明 僕は……違うと思いますね(笑)。いや、実際に夏至の日に来てみればわかるっすよ。

藤本 あ、でもかつてと現代ではズレがあるんですね。

黒沢健明 はい。そのズレで、もしかしたら4000年前は一致したんじゃないか

ないかということも考えられますね。

藤本 でも太陽に何かしら信仰というか、神を感じるのも当たり前の話ですよ。並んでいるかどうかは置いておいて。

黒沢健明 太陽と関係があるかは置いておいて。意識して環状列石を2つ作ってあるのは間違いないですね。

藤本 だいぶ日が落ちてきましたね。

黒沢健明 ですね。

矢吹 きれい。

藤本 ちょっとみんな座ろうよ。

矢吹 ああ、気持ちいい。

藤本 想像してみよう。いろいろ。

矢吹 昔の人も、こうやって座って何かを思ったりしてたんですね。

黒沢健明 たぶん。のんびりしてたんじゃないですかね。

藤本 日が昇ったり沈んだりって、やっぱり人間の生き死にに通じるよね。

黒澤正 それを感じなければ、太陽神って考えないよね。いろんなところで太陽神ってあるから。

藤本 うん。大日堂舞楽とかも、太陽神なんですね。

黒澤正 あれもおもしろいですよ。大日堂舞楽。



鹿角ホルモンと エネかん



鹿角ホルモン

大湯環状列石を後にして、僕たちは、次の約束のために鹿角ホルモンの名店「花千鳥」へ。鹿角ホルモンとは、甘辛いタレに漬けた新鮮な内臓肉をジンギスカン鍋で焼くという鹿角名物のスタミナ料理。実は、講演当日の夜にもこちらと人気を二分する「幸楽」というお店に連れて行ってもらったのですが、2度目ということで今回は「花千鳥」へ。そもそもホルモンの語源は、大阪弁の「放る（捨てるという意味）もん」だという説もあるように、かつては捨てられていた内臓肉。安くてスタミナがつくという意味では、まさに鹿角で欠かせないエネルギー源ということ、そこで僕たちを待っていてくれたのはもちろん、「鹿角のエネルギーを考える会」のみなさん。この夜をきっかけに、僕たちはさらに縄文の深い地層に触れていくこととなります。

藤本 みなさん、よろしくお願ひします。乾杯！
小田嶋さん（以下敬称略） ようこそ、鹿角へ！



山本 政文さん 33歳



山本 由実さん 33歳



坂本 寿美子さん 40歳

鹿角の
エネルギーを
考える会



小田嶋 伸一さん 37歳



米村 幸子さん 40歳



松竹 佑大さん 26歳



藤本 まずは自己紹介してもらってもいいですか。
米村さん（以下敬称略） 米村幸子です。鹿角市花輪生まれで、いまは尾去沢にいます。よろしくお願ひします。
藤本 鉱山のあるところだ。
米村 はい。
小田嶋 エネルギーを考える会に所属しています、小田嶋伸一と申します。よろしくお願ひします。
坂本さん（以下敬称略） 坂本寿美子と申します。よろしくお願ひします。
山本由実さん（以下敬称略） エネルギーを考える会というのを、木村芳兼さんに賛同してはじめてしまった、山本由実です。よろしくお願ひします。
山本政文さん（以下敬称略） 旦那の山本政文です。よろしくお願ひします。
小田嶋 そして、7カ月の山本晴礼美ちゃんです。
山本由実 晴礼美です。



藤本 講演のときも、ずっとご機嫌だったよね(笑)。今日はそんなメンバーですか？

坂本 もうひとり、鹿角の道の駅に勤務してるメンバーが来ます。

藤本 「鹿角のエネルギーを考える会」は、木村芳兼さんと山本由実ちゃんの二人ではじめてのことですか？

山本由実 そうですね。芳兼さんが「『シェーナウの想い』っていう、チェルノブイリの原発事故後に、市民電力で脱原発したっていうドキュメンタリー映画を上映したいけど、誰か

手伝ってくれる人はいないか？」っていうのをSNSで呼びかけていて、それでお話を聞いてみたら、いろいろ考えてる人だなあとって。鹿角はエネルギーがほんとに豊富で、食糧の自給率とエネルギーの自給率が200パーセントを超える市は、鹿角市しかないんですよ。

藤本 それは日本中で？

山本由実 そうです。というのを芳兼さんが教えてくれて。

藤本 なるほど。そういうことを、よそ者の芳兼くんから教えられ。

米村 由実ちゃんもよそ者ですよ。

山本由実 仙台市からお嫁に来たんですよ。

山本政文 学校で仙台に出て。そこで連れて来ました(笑)。

藤本 じゃあ結婚してこっちに来たんだ。

山本由実 そうです。

藤本 なるほど。で、映画上映して、その後どういう経緯でエネかん(鹿角のエネルギーを考える会)になっていったの？



山本由実 うくん。簡単に言うと、私の友だちを集めたんです。

米村 集められました(笑)。

山本由実 「鹿角のエネルギーを考える会」っていう名前も、何かないと人を集められないからって。私、エネルギーのことはわからないんだけど、考えてみたいんだよ、ということ。「鹿角のエネルギーを考える会」っていう名前にしたんです。血迷ってたなあって思うんですけど。

藤本 なんで？ いい名前。

山本由実 考えたかった会なんです。

小田嶋 最初、鹿角のエネルギーを本気で考えてる人がいるから、このLINEの仲間に一緒に入ってみない？って誘われて。それで入ってみたら、

「こんなジメジメして草ぼうぼうで汚いの座れない！」って言うたら「お前は都会のコンクリートのあんな汚いところに座れるのに、ここに座れねえってどういうことだ」って。そのまま喧嘩しながら山登って行って、山小屋に着いても、埃っぽくて汚いところで、そこにウチの子どもを放そうとするから、それでまた喧嘩して。「ここは神さまが宿ってる神聖な場所だからいいんだ」って「いやダメだ。いくら景色がきれいでも許せない」って。そのまま数日喧嘩してたんですけど、いますごい反省してるんですよ。

小田嶋 よく変わったよね。

米村 由実ちゃんってそんな子だったんだっけかって思う。

小田嶋 そこで変わってなければ、エネルギーを考える会発足してないからね。

山本由実 全部が目からウロコで、ボロボロボロって剥がれるように、人ってこういう生きものだっただっていう。開墾しようと思っ、元田んぼの

「ここは神さまが宿ってる神聖な場所だからいいんだ」って「いやダメだ。いくら景色がきれいでも許せない」って。そのまま数日喧嘩してたんですけど、いますごい反省してるんですよ。

小田嶋 よく変わったよね。

米村 由実ちゃんってそんな子だったんだっけかって思う。

小田嶋 そこで変わってなければ、エネルギーを考える会発足してないからね。

山本由実 全部が目からウロコで、ボロボロボロって剥がれるように、人ってこういう生きものだっただっていう。開墾しようと思っ、元田んぼの



米村 食べ物もあるし、祭りもあるし、芸能もあるし、遺跡もある。

山本由実 豊かなところに来たんだなって思っています。

荒地地みたいなどころを借りて、まず掘ってみようと思っただけで、人生で初めてこんな風に働いたっていいくらい、倒れる程の疲労感を味わったんだけど、すごい充実してびっくりして。それが7年前位になるのかな。そこから畑をやりだして、いいとこだなって思うように変わってきて。そして、農業はヤバイでしょ、ってだんだん気になってきてしまっただけ。

藤本 当たり前前に農業使うもんね。
山本由実 いけないってわかってきたと同時に、でも入れないとうまくいかないっていうのもわかってきて。

藤本 だから否定できないんだよね。

山本由実 そこがすごい難しいんです。

藤本 頑なにいまは入れてないの？

山本由実 はい。

坂本 ほんとバッチリはまってからすごいよね。土汚いか言っただけに小田嶋 いま、土食って言ったら食うんじゃないの？

坂本 こういう子がいると、地元の人には「ああっ！」って目が覚めるというか、あらためて気づくことがある。

藤本 よそ者の役割だね。
坂本 よそ者の人は、純粹に良いって思ってくれるじゃないですか。だけど



うちらは、ずっと住んでるから嫌なことをただただ嫌だっと思って、だから嫌だったことを忘れてしまいがいいってなかなか言えないんです。だけど、こういう人が「いいんだよ」ってめっちゃ言ってくれるから。そういう風を入れてくれる人がちゃんといれば、ここはもっと発展するところで、そこはエネルギーと結びつくんだよ。

藤本 そのとおりだね。

(遅れてメンバーの一人が到着)

松竹さん(以下敬称略) 松竹って言います。

一同 よろしくお願ひします。



小田嶋 エネかん最年少の26歳。みなさんが6号目の表紙撮影をされた道の駅鹿角「あんたらあ」の。

藤本 あくそうか、その節はお世話になりました。では、あらためて、乾杯！

一同 乾杯！

小田嶋 メンバーはあと二人いるんですけど、今日はこれで全員かな。

藤本 エネルギーを考える会って言われたら、相当堅苦しい感じのイメージもあって。そういうイメージで3日前に来させてもらって、みなさんにお会いしたら、ずいぶん適当だありって(笑)。そこがすごいいなと。

小田嶋 ありがとうございます(笑)。

藤本 ガチガチで拳かかけそうな感じだったら、引いてしまうけど(笑)。そうじゃなくて、日々の暮らしや食事とか、全部エネルギーに繋がってるじゃんっていう、そういう考え方をみんなが共有して、だからもっとこんなふうにも暮らしたいんだっていう、すごくシンプルな話で、良いなあってあらためて思いました。

小田嶋 そう感じていただけると、す

縄文の湯

エネルギーに満ちあふれたエネかんのみなさんの夕食を終えた僕たちは、鹿角ホルモンの美味しい香りを流すべく、まっすぐ西へ車を走らせ、北秋田市にある「縄文の湯」へ。22時半に到着し車を降りると、なんとも美しい星空が広がっていました。明日27日はこの近くの畑をお借りしての表紙撮影の日。この調子だと間違いなく良い天気だとひと安心して温泉に。それぞれ充実した気持ちで就寝します。

やってるんですよ。

藤本 へえ。明後日28日とか行けないかなあ？ 28日っています？

山本由実 いますよ。

藤本 その日は畑仕事は？

山本由実 稲刈り。畑はね、ちょっと見せられないような感じ。

小田嶋 農業使わないので。

山本由実 畑っていうよりは草原(笑)。

藤本 早い時間に行って、畑見たいな。あと、パンフレットを見つけたんですけど「でんぱく」ってイベントありますよ？ 鹿角の伝説泊覧会でしたっけ？

松竹 自分、でんぱく担当

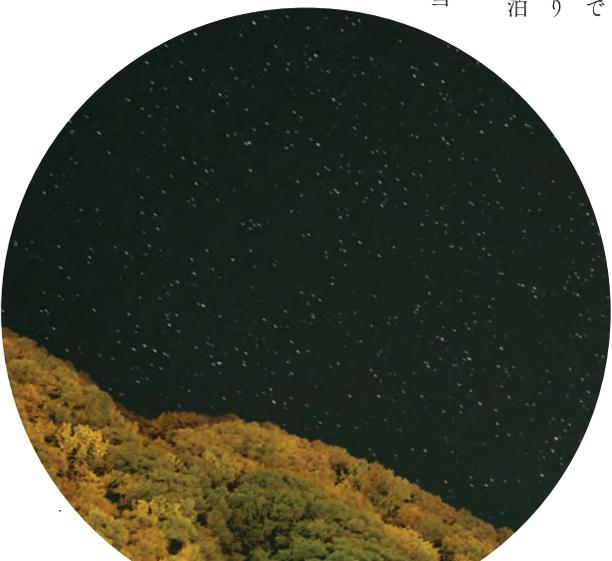
です。

藤本 おお！ そうなんです。例えばそういう伝説を話してくれる語り部の方に、ダンブリ長者の話を、大日堂で話してもらえたらと思うんですけど。

松竹 わかりました。手配してみます。
藤本 やった！



藤本 そういえば小田嶋さんは、大日堂舞楽の町出身なんですよ。ね。
小田嶋 はい、小豆沢です。
山本由実 私も大日堂の向かいに住んでいます。
藤本 大日堂行きたいなあ。
小田嶋 大日堂舞楽のなかに、権現様(獅子舞)の、「おっぱからみ」っていう獅子のしっぽを持つ役があるんですけど、それを(由実ちゃんの)息子が



第4章

伊勢堂岱
遺跡と
板状土偶



9月27日



9時に展示史料室に到着した僕たちは、北秋田市職員（教育委員会生涯学習課）の榎本剛治さんに案内してもらい、伊勢堂岱遺跡についてお話を伺います。



榎本さん（以下敬称略）
お墓の中から頭と体が少し離れて見つかったんですね。
一同 へえ。
榎本 土偶自体は、伊勢堂岱遺跡から200点近く出ているんですが、完全な形なのはこれ1点だけです。
一同 ええ！

ここから車で30分ほどの距離にある白坂遺跡から発掘された「笑う岩偶」というめずらしい岩偶を模した湯口から、とめどなく溢れ出る天然掛け流し温泉に夜も朝もしっかり浸かって疲れをとったのんびりチーム。朝ごはんを済ませ出発の準備をしていると、エネカんの山本由実ちゃんから電話がかかってきました。なんと、ちょうど伺いたいと言っていた明日28日に、大日堂で子どもたちのための昔語り会があるとのこと。なんてタイミング！明日への期待が一層高まるなか、今日はひとまず北秋田市文化会館にある展示史料室へと向かいます。北秋田市の伊勢堂岱遺跡から発掘された板状土偶。逆三角形の身体にとぼけた顔というそのかわいらしい造形で、今号の表紙の最も重要なモチーフとなった土偶の実物が飾られているとのことでした。

榎本
剛治さん
38歳



榎本 はい。同じようなものが他の遺跡からもいっぱい出てきていますけれども、本当に完全な形になっているのは数少ないです。4000年前の土偶の代表例として、本とかに使われることが多いですね。
浅田 そうなんですか。
鍵岡 こんな表情なんだ！ 不思議。
矢吹 おもしろい顔ですよね。
榎本 上の穴は、よく目と思われるんですけど、下と違っていますか？
鍵岡 えっ違うんですか？
榎本 目じゃないんです。手前の。眉毛があって、目、鼻、口。上の穴は、

たぶん髪型を形骸化したものなんじゃないかと思ってるんですけど。一同 へ。

矢吹 髪とかあつたかもしれないですね。藁とかそういうのをに入れて、もじやもじやさせてたのかも。こっちの小っちゃいのが目？

藤本 そうそう。眉の下にある。

浅田 服は着ているんですかね？

胸っぽくも見えますけど。

矢吹 男性なのか、女性なのか？

榎本 いろいろ議論が分かれるところなんですよ。

藤本 この子が

出てきた伊勢堂

俗遺跡も、環状

列石ですか？

榎本 そうですね。大

湯と同じです。

田宮 伊勢堂俗という名前はどういう意味なんですか？

榎本 地名です。字名で。北秋田市脇

神字伊勢堂俗という。遺跡には必ず字

名がつくことになってるんですよ。

昔、神社があつたらしいんですよ。「岱」

は、このへんでいう、こんもり高い山

神社があつて、こんもり高い山という

意味ですね。



一同 そうなんだ。

藤本 それこそ、こういう高い場所だから神社が建つたのかもね。

榎本 そうなんです。伊勢「堂」ですからね。大湯にも行ってらっしゃったと思うんですが、「万座」「野中堂」で、万座の「座」は神が座るという意味なので。やっぱりそういう地名なんですよ。もちろん、それは縄文よりも後の時代のことですけど。

藤本 なるほど。縄文から

の意識が地名に

残っているって

いうことですよ

んね。伊勢堂俗

遺跡の大きさは

大湯と比べると

どのくらいなん

ですか？

榎本 そうです

ね。ちょっと小さいんです

よ。一番大きいもので45メートルなので

石も、大湯に比べれば小さめなんです。

藤本 やっぱ伊勢堂俗もお墓なん

ですか？

榎本 そうですね。石の下にお墓を

作って。

榎本 そうですね。そのなかでも北東

北、といっても秋田の県北から北海道

にかけての間が一番早いと思われ

田宮 長野とかあつちの方でも、こ

うのは出ているんですか？

榎本 出ますね。というのは、発祥は

こっちなんですけれどもこっちの人々

はたぶん向こうへ行って、「うちの実

家はこういうの作っているんだぜ」と

か。

藤本 「秋田ヤバくね？」とかね。

一同 ははははは。

榎本 わからないってすごいですよ

藤本 うん。わからないからおもしろ

い。

榎本 はい。わからないから想像する

のがおもしろいですよ

藤本 これはこういうことですよ

言われるよりね。「わからないんです

よ」って言われた方がおもしろいな

表紙撮影から 遺跡へ

榎本さん、とても素敵な方でした。一旦、史料室を出た僕たちはいよいよ今号の表紙撮影に。その模様と成果は表紙と表紙裏をご覧ください。最高



た僕たちは、平成28年に展示施設や駐車場などをオープンさせるべく現在工事中の伊勢堂俗遺跡へと、再び榎本さんにご案内いただきます。

藤本 榎本さんは地元の方ですか？

榎本 いや、違います。千葉県出身です。

一同 へー。

藤本 どういうご縁で？

榎本 まあ、こういう仕事があ

あって。

田宮 秋田に来られてどのく

らい経つんですか？

榎本 14年くらいになります

ね。

田宮 そんなに経つんですか

発掘とかで？

榎本 はい。いま、発掘は一

区切りしてますけど。

田宮 学生のときから、好き

で？

榎本 そうですね。子どもの

頃からですね。多感な時期は、

やっぱり歴史が好きなんて言

えなかったですね。モチない

じゃないですか。

一同 (笑)。

藤本 たまに子どもたちが見学に来て、興味あるような子がいたらすごく嬉しいんじ

ないですか？

榎本 ええ。ありますね、本当に。そういう子は、全面的にアピールしてきますからね。

一同 へえ!!

榎本 お前、大丈夫か？ っていうくらい(笑)。

藤本 かつての自分を見るように？

榎本 そうですね(笑)。

浅田 発掘作業もしたんですね？

榎本 はい。ずっと。

浅田 発掘作業したいんです。

榎本 いやあ(笑)。体験発掘ですか。

浅田 いま、少ないんですけどね。発掘が。

榎本 そうなんです。

榎本 本当に、公共事業が減っていますのでね。真面目な話をすると。やっぱり、開発がないと発掘もできないので。

藤本 なるほど。

鍵岡 掘り起こす理由がないと掘れないんだ。

榎本 そうなんです。我が業界は、そういうものと表裏一体なので。

鍵岡 じゃあ、秋田はたくさん開発されたらけっこう出てくる可能性は高いんですね？

榎本 高いですね。



藤本 高台だから、景色がすごくいいですね。

榎本 景色はいいですね。

矢吹 これも、昔も見えてたから、このなかであって。

榎本 あの左の方が世界遺産の白神山地ですね。ちなみに5月頃にここを開放すると、我々の説明を聞かないで、みなさんワラビ採りに(笑)。

一同 はははは(笑)。

藤本 ここはやっぱり、山菜が採れるんですね。

榎本 もう、いっぱい採れます。「そこ入らないで」って言っても(笑)。

矢吹 入っちゃう。

榎本 「いやー今日楽しかったー」とか言ってる。

一同 はははは(笑)。

矢吹 楽しみ方が違う。

榎本 まあそういう楽しみ方もあります。

今井 縄文人もワラビは？

榎本 採ってますね。

矢吹 土器の模様もワラビに似てるし。今井 ね、ワラビとかゼンマイはいですよ。ね！

土偶大好き

ここまでガイドしてくださったお礼に、僕たちは表紙撮影で使用した巨大板状土偶を榎本さんにプレゼントすることに。ということで、撮影のためにかけつけてくれた、秋田公立美術大学の学生で、のんびり大道具担当の大谷心ちゃんと授与記念写真。

その後、伊勢堂岱遺跡から車で20分ほどの距離にある北秋田市森吉庁舎まで、笑う岩偶の実物を見に行き、今日も充実の取材を経てひとまず北秋田市



の鷹巣へ。秋田カメラマンの陽馬が大好きだという、その名も「大好き」という居酒屋で夕ごはんミーティング。明日からの行動を整理します。

とりあえず今日の宿を鹿角の湯瀬温泉に決めた僕たちは、明朝、山本由実ちゃんのもとに伺い、畑を見せてもらう約束と、大日堂でタイミングよく開催されるという子

ども向けの昔語り、「ダンブリ長者」のお話を聞かせてもらうことだけが決まっています。まるで環状列石みみだなんて言いながら一口餃子をつまみつつ、やっぱり地熱発電所

を見てみたいよね、という話に。そもそも昨夜の縄文の湯しかり、温泉の豊かな鹿角で、もっと温泉に浸かりたいなあと、取材なんだか慰安旅行なんだか、わからない空気になってきたときのこと、店内のテレビ画面にみんなが釘付けになります。長野県と岐阜県の県境の御嶽山の噴火のニュースでした。湧き上がる自然エネルギーの強さに、全員が言葉をなくします。





第5章

ダンブリ
長者と
太陽と

9月28日



昨夜の宿泊先の湯瀬温泉から車でわずか10分の距離にある大日堂こと、大日靈貴神社。僕たちが普段イメージする神社の社殿とは明らかに違う姿と、想像以上に立派な造りに全員圧倒されます。ここで毎年1月2日に行なわれる「大日堂舞楽」は国の重要無形民俗文化財、さらにはユネスコの無形文化遺産にも指定されており、吹き抜けになったお社の内部中央にはその舞台らしいものがありました。真っ白な雪景色のなか行なわれる神事を想像し、ますます大日堂舞楽を見てみたいと思いがつのるなか、お参りを済ませて外に出ると、エネカんの山本由実ちゃんが子どもたちと一緒に待っていてくれました。由実ちゃんの家は、本当に大日堂のすぐ真前で、子どもたちと一緒にひととおり周辺を案内してくれた彼女は、黒いワンボックスに乗り込むと

「言っときますけど、ただの野っばらですよ」と笑って大日堂の横の坂道をグングンと上っていきます。遅れないように後をついて走ること数分、車を降りると、確かにそこには自然味溢れる畑がありました。

山本 私がおばあちゃんになったら、家族の多いお家に食べ物を持って行ってあげようと思ってるんです。

山本 うんうん。
助かるの、本当に。大根とか

玄関に置いてあって。

藤本 そうだね。しかし本当にいい場所だなあ。

矢吹 うん。山が最高。

(由実ちゃん、土手から畑のなかへ軽々とジャンプ)
鍵岡 わつ、子ども抱きながらジャンプした！

一同(笑)。



山本 豆はこのまま放っておいて、大豆にして味噌にしようかなって。一同へえ。

陽馬 完全に自然農法？

山本 農薬や化学肥料は使ってないです。自然に近い野菜を食べたいなと思ってるので。米ぬかとかまいて。大変なんだ。草取りもやりたいんだけど、できない。いつになったら自分で草取りってできようになるのかな。
田宮 暇ないもんね。
山本 うん。みんな、毎朝起きてやるんでしょね。



そこからさらに数分山道を登ると、彼女が給水所と呼ぶ、こんこんと清水が湧き出ている場所がありました。「うめっ!」「これ、最高だね!」「うん美味!」「代わる代わるみんなが水を飲み、あらためてこの土地の豊かさを体感しながら、僕はあらためて山本由実という女性がこの町にやってきた意味について考えていました。大日堂という太陽神が祀られた大切な場所の前で、彼女はまるで太陽のようでした。



ダンブリ長者

ふと気づけば、もう昔語りがはじまる時間。大慌てで大日堂まで下りてくると、ちょうど子どもたちを前に、語り部の女性がお話を始めようとしているところでした。今回の昔語りには、未就園児を集めてさまざまな体験をしてもらおうと大館市の支援センターが主催となつて行なわれているとのこと。語り部の女性はずっと保育園の園長さんを務めておられた藤田礼子さんという方で、わかりやすく子どもたちに語りかける姿に、僕たちもほとんどん惹き込まれていきます。ではここで藤田礼子さんパージョンの「ダンブリ長者」をお届けしたいと思います。

藤田さん（以下敬称略） みなさん、こんにちは。昔話なので鹿角弁について、昔から伝わっている言葉で話すのですが、今日ね、ちっちゃいお友だちもいっぱいなので、わかりやすく話したいと思います。でも時々、鹿角弁が出てきて「えっ？ なんのことかなー？」ってわからないところがあるかもしれないけど、「うーん、こーいうことかなー？」って想像しながら聞いてください。じゃあ、よろしくお願いします！

問（拍手）

藤田 ダンブリって何だかわかりますか？ わかんないよね。ダンブリってね、トンボのことなんだって！

子どもたち ほく？

藤田 それで、むかしこの八幡平の小豆沢に、



正直者で、働き者で、親孝行な若い夫婦が住んであったんだって。だけど、あんまり正直だからね、なーんぼ一生懸命働いても働いても、いつも貧乏。お正月に、「あゝお正月だというのに、神さまにお供えする、餅つこも、酒つこもないな」ため息ついて、悲しく思ってたらね、夢で神さまが現われてきたんだって。そしてね、「ここはお前たちの住むところでない、この川をずーっと上って行けば、広い場所があるから、そこ



に行つて田んぼや畑を切り開けば、長者と呼ばれる、徳のある立派な人になれるよ」って神さまが言って消えたんだって。それが、その若者だけでなくて、お嫁さんも、二人とも同じ夢を見たんだって。それで神さまに「ありがたうございまーす」って感謝して、次の日、雪降って寒いのに、若者は年とったお父さんをおんぶして、嫁さんは荷物を少しもって、村の人がたに別れを言って、川をずーっと上って行つたんだ。日暮れて暗くなるころ、岩手県の田山

というところの奥に広い場所があったんだって。「あゝ、ここが神さま、教えてくれた場所だな」って、そこで一生懸命働くことにしたんだ。でも最初は貧乏で、食べる物なーんにもなくて、ワラビとかクズとか土の中から根っこ掘ってそれ食べながら、一生懸命働いて、畑とか田んぼ作つていったんだって。ある暑い夏の日に、木陰で昼休みしてらっけ、あゝんまり暑いし、一生懸命働いて疲れたから、若者つい、ウ



トウトーって寝てしまったんだ。しっけ、岩の陰から、ダンブリ、トンボが飛んできて、若者のくちびるに尻尾をちょんちょんとつけてまたスーっと飛んで、また飛んで、また飛んで、何回もそれしたんだって。お嫁さん、「不思議だなー」って見てたんだ。し



たっけ、若者、目を覚まして、くちびるをこらやつてなめながら、「あー、いま、俺たいしたうめえ酒つこ飲んだ夢見た。おめさも飲ませてなあと思つたら目覚めてしまった」って言ったんだって。そして、嫁さんが「そーいえば、トンボ飛んできて、おめさのくちびるさ、尾っぽっこつけてたんだよ」って。「えっ！ 不思議だな」二人して、トンボのあと追いかけてたっけね。岩の間から水がゴボゴボと湧いてきたんだって。若者がその水、手さすくって、飲んでみたっけ、やーうめーごと、うめごと、たちまち疲れが吹き飛んで、元気モリモリになつ

たっけ、若者、目を覚まして、くちびるをこらやつてなめながら、「あー、いま、俺たいしたうめえ酒つこ飲んだ夢見た。おめさも飲ませてなあと思つたら目覚めてしまった」って言ったんだって。そして、嫁さんが「そーいえば、トンボ飛んできて、おめさのくちびるさ、尾っぽっこつけてたんだよ」って。「えっ！ 不思議だな」二人して、トンボのあと追いかけてたっけね。岩の間から水がゴボゴボと湧いてきたんだって。若者がその水、手さすくって、飲んでみたっけ、やーうめーごと、うめごと、たちまち疲れが吹き飛んで、元気モリモリになつ



たんだって！ それは、どんな病気も治って、長生きする宝の酒のこだったんだって。んで、若者たちはそれをひとりじめしないで、みんなに分けてくれたんだって。んで、その宝の泉の話、四方八

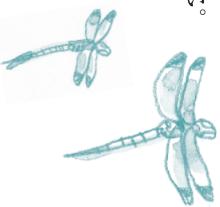


たんだって。というお許しをもらって、道路を作ったり、橋を作ったり、村の人がたみんなのために一生懸命働いたんだけど、年とって、死んでしまったら、不思議なことにあの宝の泉も枯れてしまつて、なくなつてしまつたんだと。それで、その後で天皇さまにお願いして、ここ大日堂、大日の神さまのおかげで長者になりましたっていうことを、みんなにずーっと覚えていてほしいなって、このお堂を作つたんだって。あと、もうひとつ。みんなに覚えてほしいの。米代川つて知ってますか？鹿角を流れる。知ってる？ それは、ダンブリ長者のところにいっぱい人が集まつてきて、いっぱい米といて流したからね、川が米のとき汁でしろくなくなったから、米の白い川、米白川つていうようになつたんだって。

子どもたちへえ。

藤田 いろんな話あります。あとはもう少し、みんなが大きくなつたら、聞いてくださいね。

子どもたち はい。



方に伝わっていった、知らないうちにみんな、いっぱい集まつて賑やかになつて、金だの銀だの、宝石だの宝ものいっぱい集まつて、ダンブリ長者つて、国一番の金持ち、トンボさんのおかげで長者になつたから、ダンブリ長者つて言われるようになったんだって。んで、桂子つていう夫婦の子どもが、天皇さま、継体天皇のお后さまになつて、ダンブリ長者は、天皇さまから「長者になつてもいいよ」

藤本 大日堂舞楽は1300年も続いているって、すごいですね。明治の神仏分離の時代で、いろいろななくなつてしまひそうなのなのに。

安倍さん(以下敬称略) 神仏分離では、大きなお寺でも無くなつて、神社もそれまで世襲でやってきたのが、世襲を禁じられたので、このように田舎ではそんなことないけれども、大きな神社ではそれで絶えてしまったとこがいっぱいある。で、いまは、少子化で危機的な状態が起こっている。ただ、ここはいまのところはね、やる気のある若い人たちが多くなつてるので、何とか。でもこの後がちょっと心配です。

一同 うんうん。
安倍 ここ八幡平にいても「ダンブリ長者」そのものを知らないし、大日堂舞楽を見に来たことがない人がいっぱいいる。だから、子どもたちにも学校

でも取り組んでもらつたり、ここへ子どもたちが来たときには「お父さんお母さんと一緒に見に来なさい」と喋るんだけど(笑)。実際にはまだ、理解つていのはされている



子ども向けとはいへ、初めてきちんと聞かせてもらった「ダンブリ長者」のお話に、僕たちはエネかんのことや、鹿角の町のこと、そのすべてが繋がつていくような気持ちになり、とても感動しました。お話が終わり、子どもたちが帰っていったその後、引き続き今度は、エネかんの松竹くんが手配してくれていた佐藤友信さんという方が、僕たち大人向けにしっかりと「ダ



ンブリ長者」を語ってくれました。誌面の都合でその全文をここでご紹介できないのですが、もともと八幡平小学校の校長先生をされていたという佐藤さんが語る「ダンブリ長者」は、若い二人の出会いのさまや、娘の桂子がのちに吉祥姫という名前をいただいたこと、さらにその子どもたちの話など、それが大日堂舞楽にどう繋がつていったのかがとてもよくわかるお話でした。

宮司のお話

佐藤さんの語る「ダンブリ長者」を受けて、僕はさらに、一緒にお話を聞いてくれたいた、ここ大日堂(大日靈貴神社)宮司の安倍良行さんにも少しお話を伺ってみました。



ようで、されてない。

一同 うーん……

安倍 だから、他からくる人の方が、よく知ってるんですよ。

藤本 よそ者の方がよく知ってるか。ここの、由実ちゃんもですな。

安倍 そうそう。彼女もよく頑張つてると思う。自分でほら、畑耕してさ。昨日一昨日もやってたけどさ。

藤本 ダンブリ長者そのままだなと。安倍 実は小豆沢つて昔はいまよりもっと上の方が中心で、彼女の畑とかのあたり。この建物も本当はもっと高いところにあつたのだ、という伝説がある。ただそれがいつの時代かはわからない。でもこの高速道路が通るときに、私がお話をしたら、発掘したんです。ただし範囲が狭いもんだから、建物の跡とかまでは出てこなかったけれども、それらしきものはね。ちよこつと出てきたの。

藤本へえ〜！
安倍 地続きの上の方を発掘したら、縄文から平安の遺跡がいっぱい出てきた。藤本 すごい。そもそも、大日堂つていのは太陽の神さまですよ？
安倍 そうです、そうです。
藤本 僕たちストーンサークルとかい



藤本 (いただいた名刺を見ながら) 鹿角市政策企画課政策推進班……
児玉さん(以下敬称略) そもそも公私混同な感じで関わっているんですけど、できる限り、役所の人間として、アドバイザーでもないですけど、半歩ぐらいひきながら、かつ、飲み会の上きは全力で(笑)。
 藤本 いいなあ(笑)。ありがたい立場だ。僕らも『のんびり』を作っているなか、こうやって自由に動くんで



ろいろ見ながら、ここへ来てるので、何かこうすべてが繋がるような気がしています。

安倍 繋がりますよ。ここはもうずっと、大きな鹿角っていうところの信仰圏があったんじゃないかと、私の考えでは。ここは太陽の神さまです。毛馬内ひまなに行けば月山がつさん。月の神。ストーリーなんかでも天体のいろんな関係があるというから、ずーっと昔からの信仰が根底にあった。そしてそのまま、いままで続いてきたんじゃないかなと。

こだまひろあき
児玉宏彰さん

宮司さんと別れる間際、宮司さんのお家に太陽光発電のパネルがついていて聞いて妙に納得するのんびりチーム。すでにお昼をまわっているの、ひとまず大日堂のすぐ隣にある「宮川屋」でラーメンをいただくことに。シンプル中華そばに、甘辛く煮た馬肉がまた美味しいこと！鹿角の食の豊かさをまたひとつ見せつけられたところで、由実ちゃんが「彼のおかげでエネカンは活動できてるようなもので、とてもとても大切な方です」と紹介してくれたのが、鹿角市職員でエネカンのメンバーでもある児玉宏彰さんでした。こちらは、八幡平駅に併設された「たびだち」という名の素敵な喫茶店に移動して少しお話を伺います。



ですけど、その裏で県庁の方たちが必死になって僕たちを支えてくれていて、だからこそ、こういう取材ができるっていう。それと同じだなあと思いました。エネカンメンバーの楽しさの裏には、こういう人がいたんだっていうのがいままたわかりました。
児玉 たまたまなんですけどね(笑)。
藤本 大事なことですよ。偶然のようで必然というか。今回ストーリーサークルを見て、その後、大日堂で「ダンブリ長者」のお話を聞いたんですけど、お話のなかで、湧いてきたお酒を自分の物にせず、みんなに分けていくじゃないですか。そういう、エネルギーをひとりじめしないみたいな考え方って、本当にそのまま鹿角のエネルギーの話だと思ってたんです。そう思うと、こんなに適した町はないなってつくづく思うわけです。すべてが環状列石じゃないですけど、環のように繋がっていく感じがするんですね。だけど、



すけど、その裏で県庁の方たちが必死になって僕たちを支えてくれていて、だからこそ、こういう取材ができるっていう。それと同じだなあと思いました。エネカンメンバーの楽しさの裏には、こういう人がいたんだっていうのがいままたわかりました。

この町に住んでいる人は、そういうことに気づいてないのになって気がする。
児玉 それは、ありますね。
藤本 そこに住んでいる人にとっても、きちんと繋がるのが大事で、そのことを市民の人たちに今後一番気づかせていくてくれるのが「エネカン」じゃないかって思います。
児玉 私もそう思ってます。代表の芳兼さんも東京の人だし、右腕の由実ちゃんも仙台の人なので、よそ者目線っていうか、視点っていうか、そういうので、いっぱい気づかされること、さすがあるの。大事ですよ。外の目線、視点、いろいろな意見が。



児玉
 宏彰さん
 36歳

藤本 実際また、内の人がちやんとそこで感化されてきちっと動いてくれるから、一緒になって両輪回っている感じがいいですね。
児玉 そうですね。

小豆沢の町にやってきたことで、僕たちはさらに縄文とエネルギーの繋がりを感じることができました。取材当初にあった予感が、いま確かな実感へと変わりつつある、そんな気持ちをさらに確かなものにするべく、僕たちは今夜の宿を小豆沢から25キロほど南にある後生掛温泉ごしょうがけに決定しました。後生掛温泉はホテルと湯治宿があり、その湯治宿の1階が地熱を利用したオンドル部屋おんドルになっています。残念ながらそこは予約でいっぱいながらも、温泉の熱を利用した2階の床暖房の部屋を予約することができました。由実ちゃんたち小豆沢のみなさんにお礼を伝え、いよいよ小豆沢を出発します。



ストーン サークル のなかで

第6章



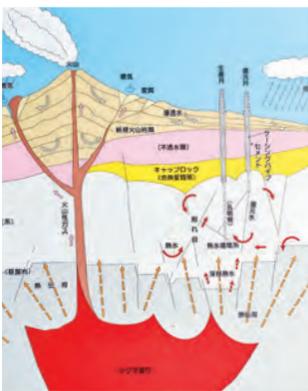
大沼地熱発電所

鹿角のみなさんの情熱というエネルギーを存分に感じ、次はこの町の地熱の言い訳を手に入れたのんびりチームは、すでに3泊目となる温泉へ意気揚々と向かいます。十和田八幡平国立公園へと入っていくと、すでに葉っぱが紅く色づきはじめ、気持ちが高揚していく反面、近づいてくる冬に心をギョッと掴まれるような気持ちに。八幡平アスピーテラインという道路を走っていると、途中何ヶ所か蒸気が上がっているのが見えました。あらためて地図を確認すると、大沼地熱発電所なるところが近くにあることがわかり、立ち寄ってみることにします。



16時過ぎ、発電所に到着した僕たちは、ダメもとで事務所へ。突然ながら

地熱発電の仕組みについて説明してもらえないかとお願ひしてみると、佐藤圭太さんという方が快く僕たちを案内してくれました。まずは仕組みが描かれたこの絵を見てみてください。



いろいろと見慣れない文字が並んでいますが、要は、マグマに熱せられた熱水を井戸を掘って蒸気として地上に取り出し、その蒸気の圧力がタービンを経由して発電機を回すことで、電気が起こされるとのこと。

藤本 一日にとれぐらい発電しているんですか？
佐藤さん(以下敬称略) いまは時間5500キロワットくらいですね。1日で言えば鹿角市花輪付近一帯の約1万3000世帯に行き渡



るくらいです。ここは昭和49年からなんで、地熱発電所としては日本で3番目にできたんですよ。

藤本 もっと掘ればいいってもでもないんですか？
佐藤 ではないですね。熱源があつて、そこから水が入ってこないと。

藤本 発電には蒸気が必要なんです。同じように蒸気が必要です。地熱発電では地球がボイラーの役割を果たしている、そこから安定して蒸気を取り出す技術が重要になります。

泥火山

突然何ったにも関わらず、丁寧に説明してくださった佐藤さんのおかげで、地熱発電のおおまかな仕組みがわかった僕たちは、後生掛温泉に向かってさらに進む途中に、またもや地球のエネルギーが露出するとも珍しい光景に出合いました。トイレ休憩をしようと思った「八幡平ビジターセンター」という施設で、僕たちは「泥火山」と書かれた案内版を見つけた。職員の方に聞いてみると歩いてすぐのこととで早速行ってみることに。すると、まるでマグマが地表に露出したかのごと



を行なう、湯浴客の方が利用するオンドル部屋は、滞在が長い分、生活感が漂う独特の空気が流れています。後生掛温泉のスタッフの上妻正義あがつまさよしさんに説明いただきながら、早速その温かい床に寝転がらせてもらいます。

浅田 あつっ！

一同 (笑)。

浅田 ここに1日中？

上妻さん(以下敬称略) そうです。1日中ゴロゴロと。最初は寝つきが悪くて、慣れるまで何日かかかるかもしれませんけど、慣れるとα波が出て、日中でもゴロゴロ寝てられるようになり

ますね。

一同 へえ〜。

矢吹 すこい、もう汗ばんでくる。

藤本 岩盤浴的な。

矢吹 気持ちいい。ぽかぽか。

藤本 この下はどうなってるんですか？

上妻 はがしてみましようか？



ゴザのようなものをはがしてもらおうと、そこにはビニールシートが一枚。さらにその下はただ温かい砂があるだけでした。

上妻 これはビニールで熱をとめてるんですね。この真ん中にずーっと蒸気を通す道があつて。それが全体の砂を温めて

います。

藤本 温かいというか、長時間触ると熱いもんな

あ。へえ〜。なるほど。みなさん、一度泊まられると、どれくらい滞在されるんですか？

上妻 1週間から10日間くらいが多いです。

藤本 はい。構造が知りたいです。
上妻 これだけです。
藤本 ええ?!



いですね。でも1泊の方も結構おられます。

今井 基本的な質問なんですけど。湯治っていうのは、あつたかいいところで熱をあげて、身体がどういう状態になっていくんですか？

上妻 まずは血の巡りが良くなります。痛いときにお風呂に入って「あー良くなった、軽くなった」っていうのは、血の巡りが良くなったから。で、やっぱり、冷えをとるのが一番。冷えがとれると、自己体温が上がって、免疫力

が上がりますから。なかなか自分のかで体温を上げるってことは大変ですからね。ここなら簡単にね。

今井 それを自然の熱で？

上妻 地熱であつたり、お風呂であつたりですね。いま、ガンの方が結構多くなつたのは、シャワー文化が入ってきたからだつていう方もおられるほど

です。



後生掛温泉

く、泥から蒸気がポコポコと立ち上っていました。昨夜御嶽山の噴火の映像を見たばかりの僕たちは、自然の強大なエネルギーに恐怖を感じ、またこれらのチカラを利用して電気を起こそうと考えた、かつての人々に思いをします。

17時半、後生掛温泉に到着。夜ごはんまでの間に温泉の方のご厚意で、オンドルの部屋を見せていただけることに。温泉地に長期間滞在して温泉療養

9月29日



藤本 今回、最初に石倉さんに話を聞いたことで、いろんなことが明確になって、充実した取材になって。温泉もいっぱい浸かって。ホルモンのエネルギーももらつて。

一同 (笑)。

藤本 本当に良かったんです。取材がストーンサークルではじまったこともあるし、もう一回ここで石倉さんにかえていくという象徴的な画を作りました。

藤本 本当に良かったんです。取材がストーンサークルではじまったこともあるし、もう一回ここで石倉さんにかえていくという象徴的な画を作りました。

く、ここまでお越しいただいてありがとうございました(笑)。

石倉さん(以下敬称略) ああ!(笑)。

一同 (笑)。

藤本 今回の取材振り返れば、ずっと天気良くて。今日も絶対晴れる気がしてたんですよ。それは石倉さんが大日堂は太陽の神さまだと言ってくれたから。なんだか守られている気がしてました。

連日の取材をあらためて振り返りながら食事をいただき、いよいよ温泉へ。実はここ後生掛温泉には箱蒸しという変わったお風呂があります。蒸気でいっぱいになった木箱の中に体を入れ、顔だけを外に出すという、まるで小さな地熱発電所のような一人用サウナ。これがなんとも気持ち良く、僕はこの箱蒸し入りに後生掛温泉はすでに4度目なのです。

上妻 そうです、表面だけ温めて。こ

こは体の芯の熱を上げるんです。

藤本 なるほど。

矢吹 冷えて、完全に温まらないから？

いよいよ取材最終日。すでに充実の取材を終えた感もある今回の旅ですが、僕は最後の締めとしてどうしても会いたい人を迎えに、大館駅に行きます。その人とは、取材を前に僕たちの道筋を照らしてくれた石倉さんでした。早朝の電車に乗って秋田市内から東北まで来てくださった石倉さんに乗せて、車でまっすぐ向かった先は、もちろん大湯環状列石。現地で黒沢健明さんとも合流し、ストーンサークルの周りに輪になって座りながら、一連の取材を振り返ります。



いよいよ取材最終日。すでに充実の取材を終えた感もある今回の旅ですが、僕は最後の締めとしてどうしても会いたい人を迎えに、大館駅に行きます。その人とは、取材を前に僕たちの道筋を照らしてくれた石倉さんでした。早朝の電車に乗って秋田市内から東北まで来てくださった石倉さんに乗せて、車でまっすぐ向かった先は、もちろん大湯環状列石。現地で黒沢健明さんとも合流し、ストーンサークルの周りに輪になって座りながら、一連の取材を振り返ります。



「池田修三と詩人たち」展レポート

本誌連載『詩修』コーナーにとっても素敵な詩を寄せてくださった、作詞家で詩人の森雪之丞さん。このご縁から、雪之丞さんがプロデュースされている、シダックス・カルチャービレッジのアートプロジェクト『アートの壁』に、この夏、池田修三さんの作品が起用されました。突如として現われた横7・8メートル×縦12メートルという巨大な女の子の姿に、忙しく街を歩く人たちも、「これはいったい誰の絵なのだろう?」と、驚きをもって立ち止まってくださり、池田修三さんという秋田の宝物を、東京の街で広く周知して下さったシダックスさんと森雪之丞さんには、あらためて感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました!

この『アートの壁』に合わせ、渋谷シダックス・ギャラリーにて開催された「池田修三と詩人たち」展では、これまで『詩修』に登場いただいた、雪之丞さんはじめ、谷川俊太郎さん、一青窈さん、服部みれいさん、倉本美津留さん、そして本展にあわせて詩を寄せて下さることになった江國香織さんにご協力いただき、修三さんの画と詩々たるみなさんの詩の立体的な展示を行いました。

その会場内で「アートの壁展示作品『ピース(1989年作)』をもとに、詩を書いてみませんか?」と呼びかけたところ、なんと100篇以上の応募がありました。そのなかから森雪之丞さんが選んでくださった、最優秀作品が左頁の作品です。

以下、森雪之丞さんの総評と合わせて、お楽しみください。



「ピース」総評 アートの壁プロデューサー 森雪之丞

この1カ月というものの、「選ばなければ!」と「ああ、選べない……」の間を幾度彷徨ったことか。本当に嬉しくて、せつない日々を過ごしました。まずは『アートの壁』プロジェクト、池田修三と詩人たちの展覧会『ピース』に詩を寄せてくださったみなさん、本当にありがとうございました。

会場での応募が96作品、HPに届いたものが19作品。真夏の陽射しと渋谷の喧騒がフツと途切れた会場で、みなさんがそれぞれに自分の心に向かい合わせ、想いを言葉に写し採られた、その瞬間を想像するだけで胸がいっぱいになります。

池田さんが描かれた『ピースする女の子』を『鏡』にして今のご自身を映されたり、『記憶』として比べられたり、『宝物』として抱き寄せられたり、そこにはまさに画と詩の様なコラボレーションがありました。

本来、それらの素晴らしい作品に順位を付けることなどできません。ですが当初の企画でしたので、『優秀』というよりは、『僕の好きな詩』というところで、選ばせていただきました。

最優秀作品である前沢しよりさんの「笑ってわらって」は、『私』と『わたし』の対比が絶妙です。『私』は今で『わたし』が遠い夏の自分なのか? 『私』は社会の中にいて、『わたし』はまだ心の中に住んでいる自分なのか? 色々な解釈をしながら読み解くと、つい何度も読み返してしまふ不思議な魅力に満ち溢れています。

まだまだご紹介したい詩があるのに……と、悔しくなります。ですが、すべてがデジタルに変換されていくこの時代に、詩を愛する方がこれだけ沢山いらっしゃると思うのは何物にも勝る喜びです。本当にありがとうございました。

森雪之丞

1954年生まれ、作詞家、詩人。76年のデビュー以来、数々のヒット・チューンを生み出す。近年は演劇&ミュージカルの世界でも活躍。現在、月刊『本の窓』(小学館)にて江國香織氏と詩の連載中。

石倉 うん。きつとそうすね。
藤本 本当にありがとうございます。
一同 ありがとうございます。
石倉 こちらこそありがとうございます。こんな最高のロケーションで。
藤本 わざわざここまで来てくださって。
石倉 いやいや(笑)。実は、ちょうどここに来たときに、食べることについて調べていたんです。
藤本 はい、はい。
石倉 例えば、秋田の在来野菜もそうですが、植物はみんな光合成をするので、大切な太陽エネルギーを「貯金」しているんじゃないのかな、と。
藤本 なるほど。
石倉 その植物を動物が食べて、人間はさらにその動物や植物を食べて、エネルギーの「貯金」が循環していくわけですね。
矢吹 うん、うん。
石倉 そうするとやっぱり、食べたエネルギーで脳が可動して、過剰した物を作っちゃったりするので、宗教とか芸術も、やっぱりちょっと過剰した太陽エネルギーを人間の心が受け止めて行動した結果なんじゃないかと。
藤本 なるほど。まさに永続地帯だ。需要より供給過剰な部分を芸術で消化したり。縄文のおもしろさですね。い

ろんなことが繋がる。鹿角の町のみなが、自分で自分たちで「鹿角のエネルギーを考える会」を立ち上げるのか、いわばそういう理由じゃないですか。こういうもの(ストーンサークル)もあるし。だから鹿角なんだというのが、たぶん鹿角の人たちはわかっていないですね。それがいいんですけど。無自覚にやっちゃっているっていう。石倉 うん。
藤本 でもそんなふうに、ダンブリ長者も、大日堂舞楽も、毛馬内の盆踊りも、ストーンサークルも。全部繋がっているっていうヒントを一番最初にくれたのが石倉さんなので。
石倉 いろいろ。
藤本 それを、丁寧に追いかけてみました。
一同 ふふふ。
藤本 ありがとうございます。
石倉 こちらこそありがとうございます。
藤本 しかし、あついな。今日は太陽が暑い。
石倉 太陽神に歓迎されているんですね。
一同 ははは。





高和製作所が、

つくってきたもの。

取材・文＝矢吹由子
Text＝Fumiko Yabuki
写真＝高橋希
Photo＝Nozomi Takahashi

「うちのイスに座ったことのない秋田県民は、きつといないと思いますよ。100人のうち、100人が座っていると、言ってもいいんじゃないかな。喫茶店、ホテル、病院……うちが関わっているものは秋田じゅうにあるんですよ。ただ、誰も知らないんだけどね。」
そんな言葉に惹かれて訪れた「高和製作所」。ここでいう「イス」とは、あらゆるイスの座面や背もたれの部分のこと。50年間にわたり、秋田の地でイスを張り、修繕し、守り続けてきたのが、この工房なのです。

詩 修

「池田修三と詩人たち」詩作企画 最優秀作品
前沢しより



「ピース」1989年

笑ってわらって

そうあなたは言うけれど
つくりわらいしかできないの
ひまわりのようにきらきらと
うみのようにけらけらと
笑えたらもっと楽なのに

写真に写る私の顔は
わたしの知らない誰かの顔
私もわたしも
ホントは涙を流してる

ねえ、
わたしはどんなふうに笑っていたの
ひまわりと

うみと

私に
気づかれないうちに

私の耳もとで
ささやいて

作品について 前沢しよりさん(長野県・23歳)

旅行中に渋谷で出会った「ピース」。私には、この女の子の目の奥が本当に笑っているように見えませんでした。写真を撮るとき「笑って笑って」と言われても、満面に笑えなかった自分の経験と重ね合わせ、詩の中の「わたし」を「本当の自分」としてつくりました。最優秀作品に選んでいただけたことに、とても驚いています!

池田修三

1922年秋田県にかほ市象潟町生まれ。版画家。秋田県内の高等学校美術科教諭を退職後、1955年に上京し版画に専念する。主テーマは子どもたちの情景で、晩年は風景画も手がける。作品は企業カレンダーや銀行の通帳、「広報さかた」の表紙などにも使われる。2004年82歳で死去。

気持ちも腕も一流に

「イスを張る」。うちは、それだけの仕事です。木の部分は外注。完全に分けられていて、ほとんどが下請け仕事です。これは2年前に関わった、ニューヨークの大きな会議場のイスで、この座面をつくる依頼をいただいたんです。デンマークの「フィンユール」っていう、60年くらい前に活躍した人のデザインで、今はつくれる人がいなくなっただのを、日本で再現したんです。デンマークから山形の業者に依頼がきて、さらにそこからうちに。誰も、うちが関わったなんて信用してくれないんですけどね(笑)。



有限会社 高和製作所

高橋和夫さん



私たちが張り替えるから大丈夫

今日も関西からこのイスを張り替えていってという相談のメールがきていました。これは「秋田木工」のイスなんです。この背もたれの部分が難しいですが、この背もたれの部分から地元の業者を紹介することもできるけれど、これは修繕したことのある人でないと上手にできないんです。そして、やったことのない業者だと、どうしても見積もりが高くなるから、お客さんは諦めて新しいイスを買うことにする……というところもあるんです。

でも、うちではいろんなイスを経験しているから、相手に不安を与えずに修繕できる。そうすれば、お客さんは



出身は山形。50年前、修業していたころは「張り屋はゴミが立つから外で仕事しろ」なんて言われてきたけれど、今はこんなデザイナーの仕事もやらせてもらえるようになって、少しずつわれわれの地位も向上してきました。

でも、そんなことはどうでもいいと思うんです。それが全てじゃないからね。「こういう仕事もできるんだ」って、気持ちのなかに持っていてほしい。ただそれだけのことです。外で「ニューヨークのイスをつくった！」なんて言わなくても、誇りを持って。すると、気持ちも腕も一流になれるんじゃないですか。

イス張りは機械ではできないから、みんな人の手でやっています。でも、うちで張れないイスはありません。こんな小さいところでもやれるんですよ。それは、鍛錬というよりは経験じゃないかな。よその会社では、自社製品しか修繕しないとあるけれど、うちはどこでも修繕するんですよ。そうすると、あらゆるイスから学ぶことができます。なぜ壊れたのか？なぜこういうやり方をしているのか？ああ、こういうやり方があるんだ！というのが、つぶさにわかる。これが、たからものなんです。その繰り返しです。



気に入ったイスを長く使うことができますよね。秋田木工のイスは100年使えるものなんです。最高の材料で、木の性質を活かしてつくられていますから。それを布地が切れただけで処分してしまうのはもったいない。だから「秋田木工のイスなら、100年のうち私たちが何回でも張り替えるから大丈夫ですよ！」ってみなさんに言っているんです。

何かがおかしい

だけど、昔からの良いイスをバンバン投げて(捨てて)しまってるところが多いんですよ。家具屋さんでは、いくらお客さんが良いイスを持っていても、張り替えよりも新しいものを勧めないと商売にならないし、イスなんて



「とにかく丈夫であればいい」という人もいる。それに、秋田は「何でも新しくしたい」という人が多いのかもしれない。この間もある施設に「これはいいイスだから張り替えしましょ」とって、サンプルも出して交渉したんですけど「新しいのを買うから」とって断わられてしまったんです。

みんな「節約」と言いながらね……。何かがおかしいんですよ。とにかくみんな、安いもの、安いもの……って選ぶようになってきていることは間違いないですよ。でも、今の時代、それは当然のことなんだともわかってはいるんですけどね。

それでも、うちで修繕したお客さんからは「ここまで良くなるなんて！直してもらってよかった」とって、喜んでもらえています。満足度は非常に高くないです。そのために、私たちは「絶対に大丈夫」というものを守らないといけません。だから「クレームのつかない」「納期を守る」ということを一番大事にして、そして、こちらがお客さんとの約束を守ったら、相手にも約束を守っていただく。すなわちお金を払っていただく、ということですよ。

なんでも応援するぞ

うちの職人は今は7人。その全員に技能検定1級を取らせています。資格を取らずには卒業させないようにしているんですよ。そして「いずれは独立してくれ」とって言っているんです。そうやって、裾野を広げていってほしいんですよ。

私なんか「10年使われたら絶対に独立する」とって、金があろうがなかろうが、何にも考えないで出てきました。でも、その人その人の生き方ですからね。今まで独立した職人は一人しかいません。



イス張りは、一人でできる仕事ではないから、職人たちには「仲間をつくれ」とって言っているんです。異業種でもいいから「俺はここをやるから、おまえはこっちの部分をなんとかしてくれ」という仲間をね。

でも、秋田で仲間をつくるって大変なんです。何か新しいことをしようとしても「よいでね（容易でない、大変だ）」って、なかなかそこから一緒に広げようとしてくれない人もいます。私はすぐ関わっていくんですけども。

私は、独立した職人や一匹狼でやってくる木工の人たちにも「なんでも応援するぞ」とって言うんです。私も昔、難儀したからね。困ったときはここにいればなんとかなるってわかれば、みんなやりやすいでしょ。それを、儲からないの、やっつけられないのって言ってしまつたら、せつかくやろうとしていることにブレイキがかかるでしょ。だから「大丈夫だ、まずはやってみれ」とって。それで、こちらにできることは気持ちよくやる。そして、ちゃんと相手にお金を払ってもらえばいいんですよ。そういうのが商売なんだよね。



池田晶紀 写真家
1978年生まれ。株式会社ゆかい代表、水草プロレイアウト、シェアリングネイチャー指導員、トッププロサウナー、かみふらの親善大使。国内外で個展・グループ展多数。2014年「大館・北秋田芸術祭2014」に参加。ポートレート作品「内陸線に花を咲かせるひと」を発表。

「木に人が抱かれると……」
「人」の「木」と書いて「休む」とは、まさにこんな感じのことでしょうか？
「サウナ」というのは、日本でも歴史が深く「蒸し風呂」のことをいいます。秋田のような歴史ある温泉地にも、地熱で蒸された箱風呂や、オンドル、温泉成分たっぷりの天然蒸し風呂、地下水を使った塩素ゼロの水風呂が贅沢にも揃っているという。
この「自然の恵」と「伝統文化」をのんびり、しかも全裸で感じられる体験がたくやってきました。
おかげさまで、無意識に閉ざされていた多くの「五感」は大開放となり、むしろ、何人もの知らない自分に出会えた気分です。そして、この旅のポイントとして、出来るだけストレスを溜め込み、あえて「忙しい」ときにくることをお勧めします。
「忙」くなった「心」が「元」の「気」に整ったからです。

裏表紙

池田晶紀 × 秋



プレゼント No. ①

ヤマダフーズ 納豆セット

「下戸式秋たんぼう」で工場見学した、ヤマダフーズの納豆です。

プレゼント No. ②

池田修三絵葉書と豆本第1集「はじまり」

編著 藤本智士 / 発行 ナナノク社

絵葉書として使ったあとは、手のひらサイズの豆本画集が残ります。

プレゼントの応募は終了いたしました

のんびり公式ウェブサイトから

ハガキでご応募の場合

①郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス ②本誌の入手先
③今後とりあげてほしい話題 ④今号で面白かった記事(複数回答可) ⑤ご感想 ⑥ご希望のプレゼント
以上をハガキに明記の上、ご応募ください。

宛先は 〒010-0021 秋田市榎山登町 7-14 のんびり合同会社 のんびり編集部

「のんびり」は人を基軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後取り上げてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。抽選で「のんびり」オリジナルプレゼントをお贈りいたします。応募締切は2015年2月15日(日)。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

コメントを添付する際に「のんびり」のハガキはいたしません。

のんびり

2014. Winter 11

2014年12月17日発行

STAFF

編集長
藤本智士 (Re:S)

編集

矢吹史子
田宮 慎
今井春佳
山口はるか (Re:S)

アートディレクション&デザイン

堀口 努 (underson)

デザイン

細川博之
Jordan Oxborough
小阪温視

写真

浅田政志
鍵岡龍門
船橋陽馬
高橋 希

題字・イラストレーション

スタダカミツ

似顔絵

田淵志織

動画

近藤康洋 (mel digital co.,ltd)
佐藤 努 (mel digital co.,ltd)

大道具

大谷 心

発行

秋田県
(観光文化スポーツ部観光戦略課あきたびじょん室
Tel 018-860-1073)

編集

のんびり合同会社 のんびり編集部
〒010-0021 秋田市榎山登町 7-14
Tel/Fax 018-832-8086
Mail info@non-biri-go-do.jp

印刷・製本

秋田活版印刷株式会社

*乱丁・落丁誌はお取り替えいたします。
*本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
*本誌データは2014年11月21日現在の情報です。
あらかじめご了承ください。
*本誌は「あきたびじょん」コミュニケーション媒体企画制作業務委託業務で制作いたしました。
© nonbiri all rights reserved.

next issue

次号 2015年3月発行予定

誰もが「これではいけない」と思いながらも、目先の利益や名声にとらわれたり、何かのせいにして諦めてしまいう中で、高橋さんは、大切なことを正直に貫いてきたように感じます。

職人に誇りを持たせ、お客さんに安心感を与え、仲間の応援をする。ときに流れに逆らうことになっても、そのために自分は何でもする。そうやって、イスづくりを通して、人との信頼関係をつくり続けてきた人なのです。

そんな高橋さんの原動力は、一職人としての、とてもシンプルなものでした。

「やっぱりつくってるときが一番楽しいな。できあがって、OKもらって『やったぜ!』っていう、あのときが最高。そのためなら何でもがんばれるんですよ!」

有限会社 高和製作所
〒01010916
秋田県秋田市泉北1丁目4 15
☎ 01818231153 4

「のんびり公式ウェブサイト」公開中! <http://non-biri.net>

航空

東京(羽田)⇄秋田 ANA/JAL … 約65分
 大阪(伊丹)⇄秋田 ANA/JAL … 約80分
 札幌(新千歳)⇄秋田 ANA/JAL … 約55分
 名古屋(中部国際)⇄秋田 ANA … 約80分
【リムジンバス】 秋田空港～秋田駅西口(約35分)
 東京(羽田)⇄大館能代 ANA … 約70分
【リムジンバス】 大館能代空港～大館市内(約55分)
 大館能代空港～北秋田市(鷹巣)(約15分)
 <ANA>0570-029-222 <JAL>0570-025-071



藤本流 のんびり飛行機の旅

車で丸1日かけて秋田へ行くことも多い僕にとって、伊丹空港から秋田空港までたったの80分。って、まるでワープ。しかも早割の安い航空券使ったら、大阪～東京の新幹線代と変わらない安さ! 関西から意外に行きやすいです。



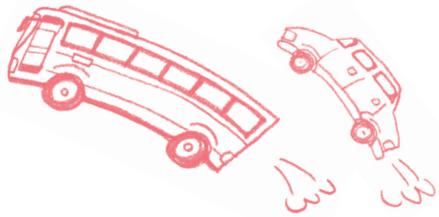
新日本海フェリー

北行 敦賀(10:00)⇄新潟(22:30)⇄秋田(翌5:50)⇄苫小牧東(17:20)
南行 苫小牧東(19:30)⇄秋田(翌7:45)⇄新潟(15:30)⇄敦賀(翌5:30)

●秋田港から秋田市街へは車で約30分。
 (秋田中央交通バスのご利用も可能)

<秋田フェリーターミナル>
 018-880-2600
 運航スケジュールは必ずお問合せください。

大阪 名古屋 東京 新潟 仙台 秋田 敦賀



高速バス

仙台⇄秋田 … 3時間35分(仙秋号)
 東京⇄秋田 … 8時間30分(フローラ号) 深夜バス
 横浜⇄秋田 … 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号) 深夜バス

<秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)>018-823-4890
 <JRバス東北秋田支店(ドリーム秋田・横浜号)>018-862-9461
 ※秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。

秋田新幹線 こまち

仙台⇄秋田 最速2時間5分
 大宮⇄田沢湖 最速2時間21分
 東京⇄秋田 最速3時間37分

<JR東日本テレフォンセンター>
 050-2016-1600



鍵岡流 のんびり新幹線の旅

新幹線での行程の中で盛岡を過ぎたあたりから急激に速度が遅くなってきて風景が近くなっていくあたりがおもしろいです。それまでの高速移動から一転、新幹線なのに眼前に迫ってくる緑の距離と人家。自分の持っている新幹線の窓から見える風景の印象とのギャップが、何となく不思議な気持ちになりますし、何回か利用しているときのタイミングで「秋田に向かってのだな」とテンションが上がってきます。



自動車(高速道路利用)

仙台⇄秋田 … 約3時間30分
 東京⇄秋田 … 約7時間30分

<日本道路交通情報センター(秋田センター)>
 050-3369-6605

non-biri akita access map

【鹿角市】

大湯ストーンサークル館 (p7~)
 鹿角市十和田大湯字万座45 TEL 0186-37-3822

【自動車】	【電車】
秋田駅 (10分)	秋田駅 JR奥羽本線(1時間50分)
秋田中央IC (25分)	大館駅 JR花輪線(40分)
五城目八郎潟IC 国道285号・103号(2時間25分)	十和田南駅 タクシー(15分)
大湯ストーンサークル館	大湯ストーンサークル館

【鹿角市】

後生掛温泉 (p42~)
 鹿角市八幡平字熊沢国山林 TEL 0186-31-2222(湯治部)

【自動車】	【電車】
秋田駅 (10分)	秋田駅 JR奥羽本線(1時間50分)
秋田中央IC (10分)	大館駅 JR花輪線(40分)
協和IC 国道46号・341号(2時間50分)	鹿角花輪駅 バス(1時間)
アスピーテライン (10分)	後生掛温泉
後生掛温泉	

※後生掛温泉へのルートは11月~4月中旬ころまで冬期交通規制となる箇所が多いためあらかじめお問い合わせください。

【北秋田市】

文化会館展示史料室 (p27~)
 (伊勢堂岱遺跡に関する史料)
 北秋田市材木町2-3 TEL 0186-62-3311

【自動車】	【電車】
秋田駅 (10分)	秋田駅 JR奥羽本線(1時間15分)
秋田中央IC (25分)	鷹ノ巣駅 徒歩(10分)
五城目八郎潟IC 国道285号・103号(1時間25分)	北秋田市文化会館
北秋田市文化会館	

※伊勢堂岱遺跡展示施設は平成28年オープンに向け工事中。

【北秋田市】

伊勢堂岱温泉 縄文の湯 (p25)
 北秋田市臨神字平崎川戸沼86-2 TEL 0186-63-2626

【自動車】	【電車】
秋田駅 (10分)	秋田駅 JR奥羽本線(1時間15分)
秋田中央IC (25分)	鷹ノ巣駅 タクシー(5分)
五城目八郎潟IC 国道285号・103号(1時間20分)	伊勢堂岱温泉 縄文の湯
伊勢堂岱温泉 縄文の湯	

